■コメント

歴史地理学　58―1（278）123-124　2016. 1

橋本道範報告・伊丹一浩報告・元木靖報告によせて

溝　口　常　俊

「資源」とは，いかに活用するか，活用してはじめてその意義が出てくる，と思う。

その意味で，第３セッションの「技術と利用」は資源を活用するための方法であり，いかに利用していくか，を具体的に示した報告で意義がある。

加えて言及するならば，第２セッションの２報告は，観光化と地域づくりであり，単に利用するだけでなく，いかにより益するか，その実態を示したものである。

こうした過程において，すぐにはうまくすべての人々に益するまでにはいたらない。なぜかというと，そこには数々の困難，バリアがあるからである，その最たるものが「権力」と「所有」で，それによって益する人（地域）と害される人（地域）が出てくる。第１セッションではそのあり方が議論されている。

というように，「資源」を扱う事は，地域の空間と歴史を扱う歴史地理学において，すこぶる重要な議論となろう。

さて，第３セッションの「技術と利用」であるが，３人の方に報告願っているが，その専門と対象地域が３者３様で，まとめてコメントするには不可能に近いが，それぞれの主張を拝聴するだけでも非常に興味深い。歴史学，農林学，地理学の専門の方が，日本，フランス，そして中国を舞台に発表された。

ここでは，「技術と利用」面に注目して，私が感化された事項を述べ，コメントに替えたい。

S105　橋本道範（琵琶湖博物館）：日本中世における「水辺」の支配―播磨国矢野庄の河成をめぐって―

どちらかといえば史料解釈を中心に置く歴史学にあって，橋本氏は地形図を駆使して議論されている点がユニークで，歴史学界に地理学の特技を広めていただいたことにまず感謝し，われわれ歴史地理研究者にとっても刺激的な発表であった。川の流路と居住地の位置関係は図示されると分かり易いし，そこに支配側の意向が如何に現れ，住民は如何に対処したか。貴重な水資源をめぐっての様々な葛藤がよく示されていた。

S106　伊丹一浩（茨城大）：19世紀南フランス・アルプ山岳地における灌漑の利用と地域資源

アルプスの草原地帯に灌漑なんてあったの，というのが発表をお聞きする前の率直な思いだった。それがスライドを見せていただき，稲作国家日本にまさるとも劣らない水路，水門があることに目を見張り，それ以上に利用し維持管理するために灌漑組合が早くから作られ機能していたことを知った。そこに国がいかに関わっているかという全体像を捉える論考がしっかりなされているので，読み応えのある論文に仕上がっていくと思う。

S107　元木　靖（埼玉大／立正大・名誉）：地域資源としての水をめぐる環境史―中国・長江流域の事例から―

日本の稲作農業史研究の第一人者であられ

る元木氏が，さらにスケールを大にして環境史の視点で中国揚子江を取り上げられた。長江を一まとめではなく上流・中流・下流に分けてそれぞれの自然環境と都市文明を考察するといった詳細な比較研究として刺激であった。

地図を用い，かつ聞き取りを駆使して水利網や遺跡，集落配置，耕地の零細性などを確認され，その上で，地域格差や地域環境問題が考察されていた。